特集　読者のエッセイ

カラー・テレビが普及すれば、雑誌も総カラーでないと売れなくなる、との極論が出るほど、テレビは出版文化に大きく作用しています。そんな中にあって、活字と映像の中間にジャンルをもつストーリー・マンガ（正しくはマンガではないのですが）は、その表現形式の大衆性によって、大きくクローズ・アップされています。そしてその中の高度な作品は、行間をもつ映像的芸術―活字を読む時間をもたない人々の読書欲求を満たす「中間読物」―として、ますます高く、広く伸びてゆくであろうことは推測に難くありません。

一時、児童誌のナンセンス・マンガと「カムイ伝」とを同一次元から取り上げたマスコミでも、マンガに対する認識が深まるにつれて、次第に区別して論じられるようになりました。また、月々「ガロ」には、現代マンガに対する多くのエッセイが寄せられています。そして、それらから求められているものは、「作家の存在する作品」ということのようです。言いかえれば、「現代に有用な作品」を書くことがマンガ家の責務であり、「有用な、しかもすぐれた作品」を数多く世におくることが、「ガロ」のレーゾン・デーテルでもあると思います。

ともあれ、ここに「読者のエッセイ」を集めてみました。

〈編集部・S〉

マンガについて

北原忠一

「大学生とマンガ」に関する論争が華々しく展開され、著名な評論誌にまで及んだ事は、つい最近の事である。この論争の是否はともかくとして、この様な論争が起こるという事は、マンガブームにのって浮足立っているマンガ家と、マンガ自体の将来進むべき道に対する消極的な暗示であると思う。現在人気マンガ家が、日にどれだけ仕事をするかは知らない。しかし、全体に見て、内容の質が落ちてきている事は明らかである。何か新しさに欠け　型にはまりつつある様に思う。又、その反動であるのかどうか判らないが、刺激の強い、粗悪な猟奇的な作品が出現し、顔を背けたくなる事がある。例えば、最近売出したU氏の作品などは、怪奇さよりもグロテスクな表現に圧倒され、胸の辺がヘンになる事が度々あり、氏の神経を疑いたくなるのである。「表現の自由」と言っても映画や書物にもタブーが存在するようにマンガにも暗黙のタブーが有る筈である。このタブーを破って、実力より、ゲテさで売り出すのは、思想を持たずにそのポーズだけマネする若者に似ている。そのマンガが子供向けならば、なおさらタブーを厳守すべきであると思う。また最近は同じ画風の作家の多い事が眼に付く。中には全く同一と言うべきものもある。これは作家の良心に期待したい。「芸術が他人のマネから始まる」とは言っても、発表の段階では当然要求されるべきモラルではないのか。この点、私は「ガロ」の編集者ならびに新人に拍手を送り、大いに期待する所である。

元来ブームと呼ばれるものは短命なものである。私は　のファンとして、「マンガ」がこの状態で衰えるのをかなしく思う。長いストーリーを持ったマンガが作られるようになってからの歴史は浅い。今から型にはまってしまうのは明らかに後退であると思う。多くのマンガ家はプロとしての自覚と責任をもって、技術の向上と、その進むべき道を開拓し、少しでも前進の心構えをもって活動すべきであると思う。　（学生）

マンガの思想性

鈴木美枝子

唯物史観から書かれた漫画として「カムイ伝」は、ジャーナリズムや、学生その他の多くの人達から注目を浴びています。過去に掲載された本書の読者評論を見ても、マルクス・階級史観・革命思想・弁証法云々といった、漫画という観念からは、およそ想像もつかないような言葉が数多く目につきます。私のように幼いときから貸本屋を通じて白土漫画の楽しさに触れてきた者にとっては、子供たちのものであった漫画が大人に取りあげられてしまったようで、何だか寂しい気持ちがするのです。確かに、白土漫画は唯物史観から書かれた漫画なのでしょうが、漫画に対して読者が「唯物史論」を振りまわしたり、「マルクスを漫画で学ぶ」とか言うのは、ちょっと行きすぎのような気がしてなりません。私はまだ唯物史論がどういうものかもはっきり知りませんが、白土氏の思想は好きですし、共感を覚えます。「これがナントカ思想で、あれがナントカ観で……」などと、むずかしいことは言わなくても、私達の目から飛びこんでリアルに平易に語ってくれるのが漫画です。その漫画が世の大学生諸君によって、今や読者層の質向上を要求しています。たかか漫画、という気持ちなどさらさらありませんが、多くの読者が漫画というものに対して、過大評価というより、誤った評価をしているように思えるのです。漫画はやはり漫画であって、それ以上の価値を求めるのはまちがっています。漫画のジャンルと、その限界についての認識を、私達はもっともつべきではないでしょうか。本当に漫画を愛する者は、その思想を愛するのでなくて、思想をも含めた泥臭い総合芸術作品そのものを愛するのだと思います。（高校生）

「大空と雑草の詩」について

—おがわあきら君に—

えがみふじお

私は彼の作品には「ガロ」で触れるほか、機会がないのでこの範囲で所見を述べたい。

この「大空と……」は、現実にある問題を素直に提起しているので読んでいて気持がよい。しかし、何かもの足りないのである。それはこの中に見られるテーマは、もう「古い」と思われるからである。反論する人もあろう。「現在、大きな問題となっているのだから、決して古くはない」と。だが、これらのテーマは幾多の作家によってすでにたびたび持ち出されて来ている。よって「テーマは古い」と言いたい。残されたものは、その「解決」である。どう「解決」したらよいのか？ それを描くところに「新しさ」がある。私はおがわ君にそれを描いてもらいたい。無論、それは容易なことではない。だが、それはなされねばならないのである。

彼の作品は「戦いある限り」でもそうだが、問題を提起しただけでその「解決」—原因の追求—がなされていない。彼がとりあげるテーマは多くの人々によって追求され、その「解決」が発表されている。それらのどれかをとるのもよし、又、彼独自の「解決」を求めてもよい。彼の持ち出すテーマについては、現在は、提起するだけでは十分でなく、その「解決」なしではすまされない時なのだ。

「大空と……」について言えば、少ない頁数の中に持ち出す問題が多すぎるのである。進学組と就職組との差別の問題、医者の金銭主義の問題、何でも金でコトを済ませる代議士先生の問題、又三回目の最後に見られる「腕力や金で人の心は動かすことは出来ない」と言っていること、などあまりにも多すぎる。これでは原因を探り、「解決」を求める余裕はとてもない。これらの問題のうち一つでもよいから深くつっこんだものを書いてもらいたいのである。

たとえば、比較的手の混んだ作品「二つの世界」は、激しい戦争が行われているベトナムと、小市民的な日本の家庭とを交互に描くことによってあることを言おうとしている。戦争の否定であるか、平和な小市民の無責任さへの批判であるか、はっきりしていないが、後者であるとしたら、それは一つの成功を収めている。だが彼が主点を置いたのは、むしろ前者であろう。彼はベトナム戦争がはやく終結すればよいと願っている。だが、どうすれば終わるのか？ 願っているだけでは終結しないし、彼の「責任」も果たせない。彼が

「責任」を果たすには、ベトナム戦争の原因を探り、「解決」を見い出すことである。解放戦線を皆殺しにすることか？　北ベトナムに原爆を落とすことか？　アメリカが引き揚げることか？etc.「二つの世界」が戦争を否定するために書かれたのなら、当然その「解決」が示されていなければならないだろう。

もっとも彼はまだ若い。「十代の最後の記録」とあるところを見ると、彼は私とほぼ同年のようである。若いだけに「解決」を求めることを急がないでいるのかもしれない。彼は「何党を支持しているわけでもない」とわざわざ断っている。不偏不党の立場とでも言うのか。私は多くの人人からこのような言葉を聞くが、そういう人々はほとんどが消極的であって何らなすところなく暮らしている。即ち、傍観者なのである。おがわ君が何党を支持しようとしまいとかまわないが、不偏不党という一種の政治ぎらい（私の経験ではそういう意味にとれるのだが）の立場にならないよう望みたい。なぜなら、彼の作品におけるテーマは、現在では政治なしでは論じられないからだ。

彼がどのような「解決」を発見するか、同年の私としてはすこぶる興味を感じる。彼が発見した「解決」が、ある政党と同じであっても、不偏不党という何やらわからぬことにこだわらず、臆せず書いてもらいたい。

これからのおがわ君の活躍を期待する。

（学生）

漫画の芸術性

越智安宣

幾多の漫画家は、漫画における芸術性を本気になって信奉しているらしい。僕は頭から否定する。漫画の興隆に便乗して気どるのはどうかと思う。人物や風景らしきものをペンで描きなぐり、文学のブの字も解さない「会話」をそう入するたったそれだけのものに、なんの芸術があろうか。きどるのもいいかげんにしてほしい。思想がどうの、文学的にどうの、リアリズムがどうの、と言うのは結構だが、一体「漫画」というものが、そんなものに固執してしまってよいのであろうか。実際そう想像すると、僕はうんざりする。まともに現在の漫画を改良して総合芸術にするならば、文学の修業もしなくてはならないし、美術家としても立派でなくてはならないし、もしそんなになってしまったら、もはやそれは漫画ではなくなるであろう。現在、漫画を総合芸術として扱うのはかわいそうである。皮肉である。滑稽である。

もちろん、僕は芸術というものを規定してそれにとじこもりたくはないし、また漫画の技術面、思想面に、作者の個性がいかされる高等な？漫画は出てもいいと思っているし、それは現在余儀なくされている。しかし、漫画というものは本来漫画でしかない。それをぶちこわしたいなら、漫画などと、へりくだった言い方などせずに、かってに創造すればいいのである。

「ガロ」4月号を見て気がついた所を書いてみる。つげ義春氏の「初茸ガリ」は、例のごとく、すてきな漫画だが、作者ばかりがうれしがっているようで、煮えきらなかった。九喜良作君の「勝利者」にも、うわすべりの気どりがある。僕にはそうとしか思えなかった。すくなくとも大本尊白土三平氏のような「おもしろさ」がほしい。水木しげる氏にも同じようなことが言える。僕は四～五年前に氏の貸本をわくわくしながら読んだが、その迫力の残像が今も脳裏にこっていて、「なまはげ」などを読むと、なにかにうらぎられた感じがしないでもない。（学生・14歳）

水木マンガの本質

原田荒士

水木マンガに対して、いろいろの批判がある。ナンセンス、グロテスク、陰湿、etc……。これは一方では確かに的を得たものと言える。テレビのホーム・ドラマや、「こころの山脈」などという味も素気もないものを良しとするインポテンシな人々が見れば、水木マンガは、全く我慢出来ない存在であろう。こんな批判は、頭から無視してかまわない。問題にすべきは、水木マンガに思想的偏見があるとする説である。いわく「社会党の御用マンガ」。水木ファンにとって、これは我慢ならない言いがかりである。水木マンガの魅力は、そのイデオロギーなどという固苦しい、うすっぺらなものに有るのではあるまい。それは、画面から

溢れ出て来る人間味以外にはない。面白くないことを、面白くないと言う、それ以外にない。そのまま生活に密着する感情である。「これが私の思想であり、主張である」といった歯の浮くような大見得は、まっぴらごめんで、そんなものが水木マンガにあるとは思えない。失敗作と言える「子供の国」でさえも、登場人物は、皆、生きた情けない馬鹿な人間だった。宮本武蔵が馬方とボタモチを取りっこしたり、佐々木小次郎が、ンモーッと言って突っこんで来たり、河童が「人生が楽しくなっちゃうじゃねえか」などとセリフを吐く。この腹の底から湧いて来るおかしさは、思想書をいくら読んでも出て来るもんじゃない。カフカがすっとぼけたような、言ってみればニヒリスティックな外見の下に、じっさい泣けて来るような人間愛が流れている。右とか左とか、そんな、卑小なものに縛られているとは、とうてい思えないのだ。水木マンガは、思想のCMでもなければ気取った文明批評でもない。多分、水木しげるの生活であり生き方なのだと思うのだ。試みに好きな作品をあげてみると、怪木、神変方丈記、猫忍、河童、水木講談、幸福の甘き香り、怪忍、といったところである。

紙数がなく、十分に書くことができないが、つげ義春氏に大いに期待する。キザな言い方をすれば、「高度の芸術」というやつを感じる。ただし「初茸がり」のじいさんの顔、あれはもう少し何とかならんものか。えらく俗っぽくて、雰囲気をぶちこわしていた。（学生・21歳）

唯物史観の根底
—山口君への反論—
名村恵史

「ガロ」20号の山口重明君の「ガロに望む」における「政治体制と科学技術史とは密接に結合している」の推察には疑惑?を覚える。まず唯物史観の出発点は当然〝階級闘争〟であるが、その対立する階級の分化は何であったのか。その要素的存在として科学技術の進歩がある。エンクロジャーに於いては紡績機械の進歩が新階級—資本主義内労働者—を多数作り出した。このつぎが階級闘争である。封建体制の崩壊は本質技術進歩、実質階級闘争である。この技術の有機性を考えなければならない。山口君はこの因果律的動行である唯物史観の根底的要素を考慮していない。けっして技術史は「軽視され易いもの」ではない。現代社会に於ける技術的革新は、資本主義内部の〝疎外意識〟を増大させ、〝労働者階級意識〟を高揚させるにすぎない—実際には、レジャーへの逃避、マスコミによる自己催眠状態になっているが— そこに階級闘争の必要性が生じるのであって、けっして大きな技術革新の必要は問われない。史的体制変化は実質階級闘争である。

また、同君は「イデオロギーオンリーの世界」と言うが、はたしてそんな世界は存在し得るであろうか。白土氏の作品に見られるように、あらゆる世界は人間本質の多元的現象として現われる。正しくは『イデオロギーが他を優超する世界』と言うべきである。また、「思想の自由が云々」に関しては、現に我々であって—保守、革新を問わず—マスコミにより、何等かの形で認識の自由を奪われているのではなかろうか。ただ〝自己は自由だ〟と思っているのみではないのか。この認識なしに、「本質的よろこび…」等と言うのは滑稽の権化のようなものである。

最後に、水木、白土氏に、他にとらわれないで独自の思想による『よい作品』を多く創作されることを切に希望します。（高校生・18歳）

マンガの分類　左右田本多

いわゆるコドモマンガが低学年向きの〈雑誌マンガ〉と高学年向きの〈劇画〉とに大別されることは、《ガロ》の愛読者には周知のことだ。雑誌マンガはコドモの（場合によってはオトナの）玩具として製造され、とかくJISマークつきなので〈おもちゃマンガ〉と称される。その代表が手塚治虫。劇画は、劇画運動として八年ほど前から若手マンガ家たちによって意識的に追求されてきたもので、ストーリーと絵とを渾然一体として物語を展開するのが、その建て前だ。この劇画は、読者層を子供から青年へ、青年から大人へと拡大することも狙った。それには劇画の水準を飛躍的に高めねばならなかったが、それを果たしたのが白土三平であり、水木し

げるであることも周知の事に属する。

水木しげるは、この大人の鑑賞に耐えうる劇画の表現本質を〈見る小説〉と名づけた。だがこれはマンガ自体による規定というよりも小説からするマンガの把握であって、それは一口でいえば、ストーリーで絵を物語るものといえる。こうした性格をもつ劇画〈見る小説〉―表現形式からすれば〈ストーリーマンガ〉だ―は、白土三平によって最高度に完成しているとみることができる。

一方、この〈もの〉としての〈見る小説〉を踏まえつつ、絵でストーリーを物語ることを開拓しているのが水木しげるである。この〈こと〉としての劇画は〈読むマンガ〉と名づけられうるのではなかろうか。ここにおいてマンガ本来の性格〈物語ること〉＝〈物語り絵表現〉が生かされ、マンガは自己回帰する。〈読むマンガ〉はマンガの自己規定だ。

このようにしてマンガ界は、その発展段階に色づけられて四分されてこよう。すなわち、〈おもちゃマンガ〉→〈現代劇画〉→〈見る小説〉→〈読むマンガ〉である。

なお白土・水木につぐ有望作家はつげ義晴一人ではなかろうか。

（学生・26歳）

〈時評〉教育体制と社会

山口重明

ベビーブーム、私学の危機、という教育体制の試練の時期にあたって、早大騒動が起こりました。今こそその根底に目を向け、教育行政の改革という大手術が必要なのです。

では一体、現代のマスプロと言われる教育体制はいかにして築きあげられてきたのか、というと、大正の初期に資本主義が拡張し、大量のサラリーマンが必要になってきた頃から、マスプロ化が始まったのです。そして現在産業界と結びついた大学と、その下に直結する高校以下の学校があり、その矛盾が現われてきているのです。だから矛盾の一つである中・高校の予備校化は、大学入試制の問題→大学の在り方→資本主義体制の矛盾、と発展するのです。

ところで、現在のマスプロ教育で大量生産されるロボットサラリーマンは、本当は産業界の為にはならないのです。それは、企業の代表ともいえる東芝が、東大中心のエリート社員をかかえているにもかかわらず、ここ数年の不況時に年功序列人事等の弊害が現われ、無配に近い状態にまで追い込まれた事でも明らかです。そしてこの東芝では、昨年から学歴修正主義としての社内検定試験制で実力主義に変わってきています。また、ソニーでは昨年人事台帳から、社員の学歴を取り除き、大学出も高校出も同等条件の実力万能主義になっています。

これは何を意味するのか。明治以来の学歴万能の出世コースは、不況という試練の時にあたって粉砕され、企業自ら実力万能への体質改善を行ってきているという事です。つまり企業の側からも大学の民主化を求め、程度の低い新設私大の増加と私大の水増し入学によるマスプロ化でベビーブームを乗りきろうとする文部省の文教政策の権威を否定しているのです。それにもかかわらず、依然として大学経営者がマスプロの上にあぐらをかいているのは、大学を企業として考えているからであって、教育者としての資格が無いわけです。

又、私大の設備投資等は、建物から螢光灯に至るまですべて入札させず、OBの財界が定価で請負っているのです。この不況時に入札させれば、三割から四割位割引くのが常識ですから、これらOB財界人は大学から注文を取る事によって暴利をむさぼっているわけです。その金は当然学生からしぼり取るのですから、これ程不合理な事はありません。それを私学の危機という言葉に隠れて、自らの経営を合理化しようとしない経営者が居すわっていられる原因の一つには、大学卒のレッテルを求める学歴万能主義による非生産的受験地獄の存在があげられます、これが企業の側からも否定されつつある事は既に述べたとおりです。

現時点に於いて、政府も国債の発行によって国民の金をしぼり取って不況を打開しようという様な目先の政策を追求するのでなく、日本の資源は人材であって、教育体制の改革によってのみ国際的文明を築けるのだという認識の下に教育の正常化という大手術をしなければならないし、すべての国民も、「くたばりだした学歴主義」を認識しなければならないのです。それが実現した時にはじめて「テスト問題を盗んだ教育ママ」のナンセンスな事件も忘れ去る事が出来ると思うのです。